

ラーニング・コモンズと横浜国立大学中央図書館 ：これまでとこれから

立石 亜紀子

1. はじめに

横浜国立大学の新中央図書館（以下当館）がオープンして、2010年4月で丸7年が経過した。中央図書館の改修・増築工事にあたっては、館長以下職員と共に、教員や学生など、立場の異なる大学関係者が共に基本設計の計画立案に携わり、2003年の新規オープンに漕ぎ着けた。その甲斐もあって入館者数は大幅に増加し、中央図書館は大学の顔・中心と呼ばれるランドマーク的な地位を確立した。

新規オープンした当館の特徴は、図書館内にあるカフェ、イベント開催を目的とした多目的ホールやラウンジ、また、国内では類を見ないほど多数設置されたグループ学習室や広いPC設置スペースなどにあった。昨今「滞在型図書館」などと称される、当時としては画期的な設備やサービスの見学に多くの図書館関係者が訪れ、当館は学生・教職員・訪問者と、さまざまな来館者で常に賑わいを見せ、一躍注目を集めた。

しかしながら思い返せば、オープン当初は、いまや大学図書館界で最も話題性の高いトピックといっても良い「ラーニング・コモンズ」あるいは、その前身的位置づけである「インフォメーション・コモンズ」は、まだまだ日本の大学図書館ではほとんど無名の存在であった。したがって当館の設置をめぐる当時の計画を振り返っても、

「コモンズ」の文字はどこにも見当たらず、また現在でも当館には、「ラーニング・コモンズ」「インフォメーション・コモンズ」の名を冠した設備は存在しない。

とはいえ、現在のコモンズの根底にある理念は、当館の基本設計計画の中にも散見される。この点に関しては先見の明があったし、国内における先駆的な存在となりえたと自負している。

そしていまやオープン後7年が経過し、大学図書館をめぐる状況は大きく変化した。近年の日本における「ラーニング・コモンズ」の隆盛は、大学図書館をとりまく環境の変化と密接な関わりがあると考えられる。そうである以上当館においてもまた、図書館のあり方や役割の変化を改めて問う時期が来ていると感じている。

本稿では、2000年に作成された当館の基本計画資料「『附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト』研究報告書」¹⁾および「横浜国立大学中央図書館施設基本計画」²⁾に基づき、当館の基本構想についてまず述べる。そして、その中で見られる「インフォメーション・コモンズ的な理念」とはどのようなものであったかを振り返りたい。つづいて、新館オープンの影響と効果、その後7年たって実施した「建物としての中央図書館」の評価から見えた当館の課題を述べる。最後に、「インフォメーション・コモンズ」的な発想を取り入れて設計された当館が、「ラー

1) 横浜国立大学附属図書館. 「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」調査研究報告書. 2000, <http://hdl.handle.net/10131/3099>

2) 横浜国立大学附属図書館. 横浜国立大学中央図書館施設基本計画. 2000, <http://hdl.handle.net/10131/3924>

ニング・コモンズ」的な要素をどのように取り入れ、今後どう変化していくべきかを検討したい。

2. 横浜国立大学新中央図書館のコンセプト

当館の設立理念について述べる前に、横浜国立大学（以下本学）の概要および、当館の歴史について簡単に触れたい。

本学は4学部4研究科を持つ中規模国立大学で、学生・教職員を中心に、サービス対象者数は約12,000人（2010年現在）である。附属図書館は中央図書館・理工学系研究図書館・社会科学系研究図書館の3館からなり、キャンパスの中心に位置する中央図書館は1974年に旧1号館、1985年に旧2号館がオープンし、2001-2002年の改修・増築工事で1号館・2号館が統一され、2003年にリニューアルオープンした。

改修・増築工事計画の基礎となったのが、2000年3月に作成された『「附属図書館のトータルデザインに関する調査研究プロジェクト」研究報告書』（以下トータルデザイン）および同11月の「横浜国立大学中央図書館施設基本計画」（以下基本計画）である。トータルデザインが学内外の有識者により、広く大学図書館のあり方を検討した基礎資料であったのに対し、基本計画はトータルデザインによって示された基本方針を受け、さらに具体的に改修・増築のポイントを決定したものであった。

たとえばトータルデザインでは、本学図書館の基本的あり方を①知的集積によって絶えず情報を発信し、知を触発する「知の蝶番としての図書館」、②利用者の利用形態の変化に対応した、「使いやすさ（ユーザビリティ）を求めて変化する図書館」と定めている。基本計画ではこれを受け、基本理念を「人と情報の出会いを演出する新しい多機能文化空間の創出」と決定し、この理念に基づいて、基本機能・運営計画・施設設備の計画と具体的な要件などが定められた。

両資料に基づいて実際に建設された当館の案内

としては、勝俣好次による新館設置当時の紹介記事³⁾が詳しい。ここでは、トータルデザイン、基本計画、そして実際に建設された建物の中から、「インフォメーション・コモンズ」の理念に近いと考えられる部分だけを取り上げて紹介することとしよう。

インフォメーション・コモンズおよびラーニング・コモンズの定義は、特に国内においては発展途上といえるだろう。ここでは、国内にコモンズを紹介した先駆者である米澤誠の提示している、コモンズが備えるべき具体的な機能要件を引用する⁴⁾。

- ① 図書館が有する各種情報資源を活用し、長時間リラックスして学習ができる
- ② 個人的なスペースの他、グループ学習できるスペースがあり、プレゼンも可能である
- ③ レファレンスサービスや各種講習会などの情報リテラシー支援を受けることができる
- ④ スキャナー、プリンタ、マルチメディア編集などの設備が利用可能である
- ⑤ コンピュータ設備についての技術的支援を受けることができる

①から順に見て行こう。トータルデザインおよび基本計画では、電子資料と紙媒体のメディアミックスの必要性を訴え、それぞれが融合して利用できる図書館環境の整備をうたっている。また、快適で開放的なフロアやリフレッシュゾーンの設置といった、いわゆる滞在型図書館としての機能は、当館の一番の特長といってよい。

②の閲覧室については、個人閲覧席を大幅に増やしたのみならず、グループ学習室を入館ゲート内外で13室と、国内では類を見ないほど多数用意した。そしてそこには、マルチメディア編集可能なPC・プロジェクタなどの設備を用意した（④）。レファレンスと情報リテラシーは、基本計画において「コンサルティング機能」として基盤サービスと位置づけられている（③）。⑤のコンピュータ技術支援は、リニューアルオープン当時は提供していなかったが、2009年から本学の情報基盤セ

3) 勝俣好次. 〈新館紹介〉横浜国立大学中央図書館. 大学図書館研究. 2003, 69, p.68-78

4) 米澤誠. 学習意欲を高める図書館サービス (特集 大学図書館と教育). 大学時報. 2007, 56 (315), p.38-41.

ンターとの連携により「ヘルプデスク」を設置したことで実現された。

このように当館は、設置当初から、いわゆる「コモンの」な初期の機能をほぼ実現していたと言える。次に、こうしてオープンした当館の当時の変化と、その後表出してきた課題について振り返りたい。

3. 新中央図書館の成果と課題

新中央図書館がオープンしたことで、入館者数は劇的に増加した。工事期間以前の、1999年および2000年の年間入場者数が35万人前後であったのに対し、新館オープン後の2003年には約63万人、翌2004年には約69万人の入館者を得、名実ともに大学のランドマークとしての地位を築いた。

一方で、建物・資料管理やその費用の問題から、当初予定した通りにはいかない面も多々あった。開放的で利用しやすい図書館というコンセプトと、建物や資料の確実な維持管理とはどうしても矛盾する面もあり、たとえばグループ学習室・講演用ホール・イベント用ラウンジについては、計画立案に携わった先生方としては、自由に出入でき、誰もが気軽に利用できる姿を思い描いていたのに対し、図書館側が利用機会の均等化や備品の管理など、管理面を考慮して利用規則を定めたため、これが議論的となる場面もしばしばあった。他にも、建物の面積が約1.7倍も拡大した結果、空調や清掃などの基本的な運営経費が増大してしまったため、建物のメンテナンスが思うように行き届かず、利用者にとって快適な空間を保てないという悩みもあった。大学図書館の予算が年々乏しくなる中でやむをえない面もあったとはいえ、理想を掲げて基本コンセプトの設計に携わった多くの先生方から見れば、歯がゆく感じられる部分も多かったことと感じている。

このように問題を抱えつつも、新中央図書館のオープンは、①大学内でのランドマークの誕生、②学生の自主学習と憩いの場の創出、③結果としての大幅な入館者増など一定の成果を得、おおむね成功といってよい滑り出しであった。

他方、当館の改修工事と前後して大学図書館に

とって大きな変革となったのが、インターネットの隆盛と電子ジャーナルの導入であった。電子ジャーナルの導入はジャーナル利用の利便性を向上させるのと同時に、図書館の来館利用の必要性を減じていくという指摘がある。図書館の持つあらゆる資料がインターネットを経由して入手できるようになれば、図書館の建物は不要になるのではないか、という議論まで生まれた。しかし、こうした議論に逆らうように長時間滞在型図書館を目指して設計を進めてきた当館は、建物に特徴を持つ滞在型図書館が、どのように利用されているか、その価値はどこにあるか、という点について自己評価に取り組むべき時期に来ていた。折しも、2009年に国立大学法人の第1期中期計画・中期目標が最終年度を迎えたこともあり、当館では「滞在型図書館」の意義と課題について明らかにするための利用者調査を実施することとした。

利用者調査の詳細については別途報告書を作成する予定があるため割愛するが、主に2種類の調査をした。ひとつは、利用者が館内のどのようなエリアで何をしているかを直接観察するもので、もうひとつはアンケート調査により、図書館の利用目的・頻度・満足度などを問うものである。特に「観察調査」と呼んでいるフロアに出て個々の利用者の行動を実際に観察・記録するという調査は、入館者数や貸出数などの通常の統計データからは図れない、「学生は図書館のどこで何をしているのか」という部分を実証的に明らかにできた点で、非常に有意義であった。

こうして建物の利用に重点をおいた調査を実施した結果、以下のような特徴を見出すことができた。

- ① 「学習の場所」としての役割が中心である。
- ② 個人学習者と、グループ学習者がいて、それぞれの学習形態にあった場所の提供が必要である。
- ③ 個人学習者は、集中して静かに学習できる場所を求めている。
- ④ グループ学習者は、話し合いによる学習効果で、学習意欲を高めている。
- ⑤ 学習目的でない学生は、飲食・休憩・雑談など、非常に幅広い用途で図書館を利用している。

- ⑥ 図書館備え付けPCの利用率が高い。
- ⑦ PCと図書館資料の両者を利用した、図書館のメリットを生かしたPC利用行動がある。
- ⑧ 図書館のイメージは良い。よく利用する学生ほど、好イメージを持っている。
- ⑨ 図書館職員の役割の重要性は認識していない。

調査により、当館は多機能であるがゆえにさまざまな使い方ができる図書館として多くの利用実績を得、学生生活の基盤の一部となっていることがわかった。また、インターネットの隆盛は図書館の利用を減じるものではなく、まさに「メディアミックス」として、図書館利用の促進剤になっていることも分かった。この意味では当館は、PCやネットワークなどの「設備」が中心であった「インフォメーション・コモンズ」の時代においては、ほぼ理想的なサービス展開を図ってきたといえる。しかし一方で、人的サービスと学習支援の部分では利用者の期待・成果共に乏しく、まさにこの部分が「インフォメーション・コモンズ」から「ラーニング・コモンズ」へ転換するために必要であり、また当館に欠けている部分であることもわかった。

4. 「ラーニング・コモンズ」への転換のために一

ラーニング・コモンズ研究の第一人者といっぴよいDonald Beagleは「インフォメーション・コモンズ」と「ラーニング・コモンズ」の違いを、「インフォメーション・コモンズ」から「ラーニング・コモンズ」への「転換」として説明している。これによれば、「インフォメーション・コモンズ」が、「伝統的なレファレンスサービスの機能を越え、情報と知識にアクセスし、管理し、統合し、そして創出して評価するための一連の活動、レファレンスサービスと情報リテラシー教育を完全にサポートするサービス」であるのに対し、「ラーニング・コモンズ」は、「これらのサービスを学内の図書館以外の学習支援サービス、たとえば、ラーニングサポートセンター、アカデ

ミックライティングデスク、チューターシステムなどとの連携に拡大した形である」としている⁵⁾。

先に述べたように、当館では2009年から、PCの技術的支援サービスとして、情報基盤センターとの連携により「ヘルプデスク」を設置している。これは一種の「ラーニング・コモンズ化」といえないこともない。しかし、Beagleの定義によるラーニング・コモンズの特徴は、こうしたコンピュータ技術支援を超えた、学習支援の強化にあるといえる。

「大学全入時代」の到来が叫ばれるようになった2000年代以降、大学は大学生の質の変化と、それに伴う中退率の上昇と言う深刻な問題に突き当たっている。単純な学力低下の問題にとどまらず、いかにして新入生を大学生活に適應させるかという部分が、大学における大きな役割の変化として問われるようになってきている。このように大学の役割が変化していく中で、大学図書館が、これまで以上に学習支援をサポートする役割、それも従来の設備・資料面だけでなく、人的支援の部分で役割を果たそうと考えるのは極めて自然でもあり、必然的な流れと言える。昨今の国内におけるラーニング・コモンズの隆盛は、大学全体を覆う大きな変革の流れを敏感に受け止めた結果としての、図書館側のアクションと考えることができるだろう。当館は開館当初こそ先進的な発想や設備を整えてきたものの、こうした近年の流れにはやや出遅れた感が否めない。また開館から時間がたつて建物への目新しさもやや薄れ、2003-2004年当時に比べ、入館者数が減少してきているという現実もある。離れた利用者を取り戻し、大学図書館としての新たな役割を担うため、学習支援のための人的サービスを取り込んだ「ラーニング・コモンズ」への転換について、真剣に検討すべき時期に来ている。

5. おわりに

ここまで、当館の7年間の歴史と、「インフォ

5) Beagle, Donald; 三根 慎二 [訳]. ラーニング・コモンズの歴史的変遷 (特集 ラーニング・コモンズ) 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, 7, p.25-34.

メーション・コモンズ」「ラーニング・コモンズ」との関わりについて述べてきた。今後の課題としては、いかにしてBeagleの定義する「ラーニング・コモンズへの転換」を図れるかを検討することであろう。

現状としてはようやく問題点が明確になってきたばかりではあるが、考え方のひとつとして、フロアの構成の見直しも必要かもしれないと感じている。当館の特徴のひとつはアクティブスペースとクワイエットスペースのゾーニングにあり、下階ほど動的に、上階に上がるにつれて静的になるという特徴を持っている。利用者調査を実施してみて、こうしたゾーニングがきわめて重要であることが明らかになった一方、中間的な位置づけのフロアを用意することがこれから取り組むべき学習支援の鍵になるのではないか、という感触を持った。つまり、適度に話し合いや相談ができるが決して騒がしくはなく、リラックスしつつも集中できる空間、というラーニング・コモンズのコンセプトが、今後の発展のヒントになるのではないかと考えている。

こうした機能を実現していくためには、大学当局や学生・教職員との意見交換など、さらなる議論と検討が必要である。伝統的・根源的な図書館サービスを基礎としつつも、大学図書館の新たな役割を担うため、積極的に改革に取り組んでいきたい。

(たていし あきこ・国立大学法人横浜国立大学図書館・情報部図書館情報課 主任)